隣は里山 遊びながら学ぶ

東京ゆりかご幼稚園

こどもの未来へ　学びやの挑戦

大人でも足を滑らせそうな森の坂道を、すごい勢いで園児たちが駆け下りてくる。「足ブレーキだよ、足ブレーキ」。注意をうながす先生の隣を、女の子も男の子も笑顔いっぱいで走り抜けていく。

「だんだん転ばなくなってきましたね」。理事長兼園長の内野彰裕さん(48)が目を細める。「経験から学んでいくんです。移転前だったら転ぶ前に手を差しのべていたかもしれない」

畑で収穫　給食に

東京ゆりかご幼稚園は八王子市の新興住宅地「みなみ野シティ」を見下ろす高台にある。市内の館ケ丘団地から移転したのは2年半前。驚くのは園庭の広さだ。移転前の9倍、約2・2ヘクタールもある。

しかも隣に40ヘクタールを超す里山が広がる。都が指定した「七国・相原特別緑地保全地区」だ。森にキツネやフクロウ、ノウサギなどの野生動物がすみ、夜な夜な園庭に遊びにやってくる。

豊かな自然のなかで園児はのびのび遊ぶ。池でオタマジャクシやドジョウを見つけ、芝生でバッタやトンボを追う。大きなヘビが小鳥に食らいつき、丸のみする場面に出くわすことも。

春に種もみをまき、棚田を起こし、夏には雑草を抜く。そして、秋には収穫だ。稲穂を干し、昔の機械で脱穀し、棒で突いて精米。かまどで炊いておにぎりにして食べる。畑ではトマトやニンジン、レタスなど十数種類を季節ごとに育て、採れた野菜は給食に。小麦は石臼でひき、うどんやパンになる。農作業を子どもたちが経験する。

長女が年長組に通う会社員福田晃仁さん(40)は「手入れされた里山の中で、子どもたちが様々なことを経験できる。毎日が行事みたい」と言う。

自然の中で遊ぶ子どもたち。広い園庭の向こうに細長い園舎が見える＝八王子市七国3丁目

自然を求め移転

内野さんが両親のつくった幼稚園を継いだのは1992年。大学卒業後、まもなくだった。母、父が相次いで他界し、園児数が激減したどん底の時期。28歳の時、幼児教育の経験豊富な現副園長の麻里さん(48)と結婚し、ようやく再建が軌道に乗った。

移転前も緑豊かな園庭は定評があったが、物足りなさもあった。「もっと日常的に自然とふれあえないか」。少年時代を過ごした清瀬市の森林や田園が広がる風景が頭にあった。見つけた場所が都市再生機構が開発した事業用地。交渉の末、5年前に手に入れた。

旧知の建築家と相談を重ね、全長100メートルの木造平屋建ての園舎を建設。園舎は、園庭の子どもを冬の強い北風から守る防風林代わりになる。荒れ野に芝生や樹木を植え、沼地は元々の自然を再現する池や小川のビオトープを設けた。遊具もほとんどが手作り。園児の父母たちが参加し、一緒につくり上げた。

今も月1回、有志らによる「鉄腕クラブ」が活動する。森の近くにツリーテラスを建てたり、小川に橋を架けたり。年長組の娘がいる伊原潤子さん(44)は「お父さんたちが作ったものだと子どもたちも安心感がある」と話す。

内野さんは「園庭、園舎をつくったら終わりではなく、毎年新たな何かを加えたい」。理想の里山教育を追い求める。　（武井宏之）

私の理想図

子どもの「生きる力」育む

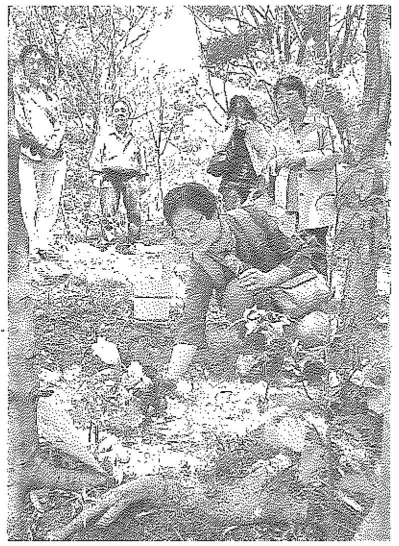
内野彰裕園長

里山は自然と人がかかわりながら環境が保たれている。日本の文化に根ざしており、特別な教材がなくても、子どもが「生きる力」を育むのに必要なものが備わっている。この環境を生かした幼児教育の質を高め、子どもたちの持つ無限の可能性を引き出したい。

隠岐の無人島「自然葬」の場に

私が死んだら、骨は自然のなかに――。死後の選択が多様化し、墓に入らない人が増えている。散骨もそのひとつ。都内の斎場が関わって山陰の無人島に開いた散骨場にも、100を超す遺骨が静かな自然と溶け合って眠る。

会社設立 110人分散骨



粉にした故人の骨をまき、花をたむける遺族＝島根県海士町のカズラ島

カズラ島。小さな島を含めると約180の島からなる島根・隠岐諸島のひとつで、外周約300メートルの無人島だ。

年間約1万4千人を荼毘（だび）に付す戸田葬祭場（板橋区）に隠岐出身の社員がおり、火葬後の多様な選択肢を提供する一環でグループ会社を設立。2008年にオープンした。5月と9月の年2回、散骨のときだけ立ち入りできる。

散骨後、カズラ島（中央）が見える対岸の慰霊所に招待された遺族たち。島への立ち入りが制限されているため、普段はここに来て手を合わせる＝島根県海士町

今年の初回は5月15日。漁船2台に25人が乗り、5分ほどで目的の島へ。小山を登った雑木のなかが散骨場。木漏れ日が差し、小鳥のさえずりが響く。

「ここらへん全体にまいてもらえれば」。礼服姿の社員、渡辺俊則さん(47)が若木の根元を指した。周囲がロープで四角く区切られている。三鷹市の野津ハマノさん(80)は白い袋に入った粉になった夫・昌司さんの遺骨をふりまいた。

隠岐は夫のふるさとだ。戦後、東京に働きに出て愛媛出身のハマノさんと出会い、結婚。3人の娘に恵まれた。無宗教で、墓は不要と言っていた。20年前に67歳で逝った後、「自然にかえりたい」との希望をかなえるつもりでいた。子どもが親の墓の前に立ちたい場面があるのでは、などと踏ん切りがつかず、骨つぼを寝室に置いていた。故郷に散骨できる島があると長女(55)に教えられ、体が動くうちに、と思い切った。

娘たち夫婦と夫の親族ら総勢11人で少しずつ粉骨をまき、最後にハマノさんがひしゃくで水をかけた。

「これでお別れです」。涙声で語りかけた。

この日散骨したのはほかに3組。相模原市の女性(66)は夫の遺骨をまいた。「墓を守るとかの負担は私たちの世代まで。背負わせたくない」と一緒に来た娘2人を見やった。「人間も動物。土にかえるのが自然」という。

75歳で逝った夫の散骨を終えた埼玉県川口市の斎木峯子さん(75)は、長男(44)と話し、自分も死んだらこの島にと決めているという。「思い出したら、島のある方に手を合わせてくれれば、それでいい」

9月にも9人分が散骨され、離島の自然にかえったのは計110人になった。

陸の散骨 トラブルも

散骨が本格的に始まったのは、1991年10月。NPO法人「葬送の自由をすすめる会」（事務局・千代田区）が相模灘で、公には初めて行った。遺骨の墓地への埋葬を定めた墓地埋葬法があるが、国は「節度をもって行われる限り問題ない」との見解を示した。同会は「自然葬」と呼び、普及活動を続けている。

25年間で約3900人の散骨をしてきた。近年は海への散骨が中心という。「再生の森」と名付けた陸の散骨場も複数あるが、一部の利用をやめている。ずさんなまき方でトラブルになる業者もおり、条例で規制する自治体が各地に広がった。農業や観光への風評を心配する声が出たためだ。

「悪質な業者の参入でとばっちりをくった。陸での散骨は難しくなっている」と西俣総平会長(78)は言う。

一方、陸で広がるのが樹木葬だ。散骨と異なり、墓地の敷地内を使う。一角を芝生と樹木で整備したり、

雑木林を活用
く」のではな
た場所に埋め
埋葬法の範疇（はんちゅう）
都内初の樹木
田市の霊園内
2005年春
定NPO法人
グセンターは
付けた。9月
計約5500
し、約350
うち約2千人
咲き誇る季節
しのぶ多くの
会員に桜葬
聞いた調査（
複数回答）では
える」が74
た一方、「継承
もいいから」（
もに負担がか
分の代で終わ
(40%)が続い
理事長(66)は
映し出してい
る」と話す。

奥多摩町お見合いパーティー 在勤者OK

人口減少が進む奥多摩町は12
パーティーを開く。初回の昨年は
26人ずつ参加し、結婚した1カ
に住んでいる。町は定住者確保
と、今年も参加者を募っている。
町福祉保健課によると、今年
の人口は5372人で、この10
2割も減った。昨年、町制施行
し、町はお見合いパーティーを
町内在住者、女性は結婚後に町
意思があることを条件に、20～50
参加者を募った。
男女26人ずつが参加し、その
月に1組が結婚。町制60年記念
家だった一軒家を町から贈られ
2回目の今年は12月23日午前10
川の町福祉会館で開催。参加費
円、女性2千円。男女20人ずつ募
加資格は昨年と同じだが、男性は
にも広がった。参加者にはグッズ
ゼントを検討中。
申し込みは12月2日締め切り。
の場合は抽選。問い合わせは町保
ター（0428・83・2777）

東京のほぉ～言!!

【せんぞやまんぞ】

《意味》　千艘や万艘。わらべうたの一節

《分布》　東京の下町

♪せんぞやま
ねはぎっちらこ
ひざに乗せた
り、歌を口ずさ
に揺られるよう
ぶる。かつて東
はこんな遊びで
やすことがあり
「せんぞやま
「千艘や万艘」
さん浮かぶ様子
数える「艘（そう）」は
「1そう、2そ
……千そう」の
う」と発音しま
は「3ぞう、千
う」のように、
わる数詞に続く